

# 農業青年のためのブラジル研修報告書

広島大学・総合科学部・総合科学科

藤岡 香穂里

## 目次

1.	研修参加の動機	1
2.	研修スケジュール	2
3.	各農業研修先の概要	5
4.	農業研修以外の活動について	17
5.	研修を終えて	30

## 1. 研修参加の動機

私は農村の生活に興味があり、大学の長期休みにはよく国内の農家を訪ねて回った。日中は農作業を手伝い、三食の食事は家族一緒に食卓を囲む。それぞれの家庭にある日常生活は、そのどれもが私にとって新鮮で、興味深い体験となっている。また、農家の方と話をすることが増え、自分の消費行動や食についても意識するようになっていった。

そうした中、国内だけでなく海外の農家の生活も知りたいという思いがつのり、大学の留学説明会に参加した。そこでブラジルの大学に留学していた先輩と出会い、日本の反対側ブラジルに多くの日本人が移住した歴史を知った。彼らは特に農業分野で多大な活躍をしたと言う。当初私は欧州への留学を考えていたのだが、その先輩の話聞いて、ブラジルの日系農家に興味向きはじめた。

私は農学を専攻しているわけではないため、農業研修という企画にふさわしい動機ではなかったと思うが、農家でのホームステイは、生活を間近にするという想像以上の体験をさせていただいた。この研修に参加するきっかけを作ってくれた先輩はじめ、渡航前からありがたいことにたくさんの方々にお世話になり、ブラジルのつながりで出会えたことをうれしく思う。



## 2. 研修スケジュール

8月

日付	出来事等	場所	備考
29日 木	グアルーリョス空港着 17:20		
30日 金	広島文化センター		
31日 土	役員会の昼食歓迎会	広島文化センター	

9月

日付	出来事等	場所	備考
1日 日	EXPO AFLORD 2019 花祭り	アルジャ市	
2日 月	センター事務局		
3日 火	移民資料館	サンパウロ文協	
4日 水	石川花卉農園 Luis Hotuo Ishikawa	Santa Isabel	
5日 木	石川花卉農園 Luis Hotuo Ishikawa	Santa Isabel	
6日 金	石川花卉農園 Luis Hotuo Ishikawa	Santa Isabel	
7日 土	トメアス90年祭資金協カイベント	サンパウロ文協	独立記念日
8日 日	CEASA サンパウロ野菜・果実卸売市場		
9日 月	レポート作り		
10日 火	Congonhas(16:40)発		
11日 水	Belem(01:35)着 北伯県人会越知会長と面会	ベレン	越知先生宅
12日 木	越知学園	ベレン	越知先生宅
13日 金	ベレン90年祭準備お手伝い	ベレン	長浜先生宅
14日 土	ベレン90年祭準備お手伝い	ベレン	長浜先生宅
15日 日	ベレン90年祭式典会場で北伯広島県人会お手伝い	ベレン	長浜先生宅
16日 月	ベレン→アカラ	アカラ	ドアミさん宅
17日 火	どあみ農場、胡椒栽培	アカラ	ドアミさん宅
18日 水	アカラ→トメアス, 小長野農場	トメアス	小長野さん宅
19日 木	小長野農場, ACTA訪問	トメアス	小長野さん宅
20日 金	小長野農場, CAMTA訪問 夕方:発表会	トメアス	藤田さん宅(JICAボランティア)
21日 土	日本語学校、移民資料館、俳句会メンバーの三宅さん宅	トメアス	藤田さん宅
22日 日	野球場, ゲートボール場見学 午後:久保農場へ移動	トメアス	久保さん宅
23日 月	久保農場	トメアス	久保さん宅
24日 火	久保農場	トメアス	久保さん宅
25日 水	久保農場, 夕方:大西農場へ移動	トメアス	大西さん宅
26日 木	大西農場	トメアス	大西さん宅
27日 金	稲田農場, 夕方:花輪農場へ移動	トメアス	花輪さん宅
28日 土	敬老会準備手伝い	トメアス	花輪さん宅
29日 日	敬老会	トメアス	花輪さん宅
30日 月	花輪農場, 午後:藤橋農場へ移動	トメアス	藤橋さん宅

10月

日付	出来事等	場所	備考
1日 火	藤橋農場	トマス	藤橋さん宅
2日 水	藤橋農場 夕方:発表会, 送別会	トマス	藤田さん宅
3日 木	トマス→Belem(16:30)→Guarulhos(20:10)		
4日 金	レポート作り		
5日 土	村上・田中さんとSEBRAEの起業家フェア	Atibaia Tanque地区	
6日 日	田中・村上栗農場	Atibaia Tanque地区	
7日 月	田中・村上栗農場	Atibaia Tanque地区	
8日 火	田中・村上栗農場	ブラガンサ	フェーラ見学
9日 水	田中・村上栗農場, 午後:満生農場へ移動	Atibaia Tanque地区	満生さん宅
10日 木	満生農場, 午後:田中農場へ移動	Atibaia Tanque地区	
11日 金	村上・田中栗農場	Atibaia Tanque地区	
12日 土	養蜂農場視察	マイリポラン	
13日 日	村上・田中栗農場と近辺の蔬菜農家	Atibaia Tanque地区	
14日 月	レポート作り		
15日 火	USP見学	サンパウロ総合大学	
16日 水	サンパウロ→Mirandopolis - SP		昼行便バス 12:30発
17日 木	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
18日 金	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
19日 土	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
20日 日	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
21日 月	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
22日 火	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
23日 水	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
24日 木	弓場農場 Mirandopolis - SP	アリアンサ村	
25日 金	弓場農場 Mirandopolis - SP→サンパウロ	20:00発 5:20着	夜行便バス
26日 土	休養	広島文化センター	
27日 日	加納ジャネッチさん宅訪問	Ribeirão Pires	
28日 月	レポート作り		
29日 火	山下果樹農園(ブドウ、アテモヤ、ピワ、デコボン)	Colonia Pinhal地区	São Miguel Arcanjo市
30日 水	山下果樹農園(ブドウ、アテモヤ、ピワ、デコボン)	Colonia Pinhal地区	São Miguel Arcanjo市
31日 木	山下果樹農園(ブドウ、アテモヤ、ピワ、デコボン)	Colonia Pinhal地区	São Miguel Arcanjo市

11月

日付	出来事等	場所	備考
1日 金	山下農場~ソロカバ市~サンパウロ	Colonia Pinhal地区	9時発、17時着
2日 土	お盆休み 県人会カラオケ大会準備のお手伝い		
3日 日	県人会カラオケ大会のお手伝い		
4日 月	Congonhas(11:30)→Iguacu(13:10)		
5日 火	イグアス観光		
6日 水	パラグアイ農場	パラグアイ国	
7日 木	Foz do Iguaçu		
8日 金	Foz do Iguaçu→サンパウロ		飛行便
9日 土	Feira de Artes da Praça Benedito Calixto	Pinheiros SP	9:00~19:00
10日 日	Feira de Natal Frances 田中さんのお手伝いと見学		
11日 月	Pardinho SP	吉田さん宅 香山文庫	バス10:30発
12日 火	Pardinho SP	吉田さん宅	
13日 水	Pardinho SP→サンパウロ		
14日 木	野田カリさんが市内案内		
15日 金	休日		共和国宣言
16日 土	Itaporanga Joana Takeyama		7:00、または13:15
17日 日	Itaporanga		
18日 月	Itaporanga		
19日 火	Itaporanga		
20日 水	Itaporanga		
21日 木	Itaporanga→São Paulo		7:10、または12:10
22日 金	レポート作り 夜7時から青年達の交流会		
23日 土	役員会・発表会・昼食送別会→Atibaia		11:00開始
24日 日	Atibaia→サンパウロ 県人会の忘年会		
25日 月	帰国準備		
26日 火	グアルーリョス空港 23:20 チェックイン		
27日 水	グアルーリョス空港 03:00 発		
28日 木	日本着		

### 3. 各農業研修先の概要

#### 農業研修スタート

モジ・ダス・クルーゼス(Moji das Cruzes)はサンパウロ、リオの二大市場を持つ近郊農業地帯でブラジル最大の野菜生産地である。主要産物は馬鈴薯からはじまり、野菜、果樹、養鶏、花卉と変化してゆき、日系の生産者の数は減りつつあるが、農業に限らず、日系人があらゆる分野で活躍している。

毎年約四万人が訪れると言われていたアルジャー(Arujá)市の花祭りに県人会の方が連れて行ってくださった。



(写真：ニッケイ新聞より 2019 花祭りの様子)

<https://il.wp.com/www.nikkeishimbun.jp/wp-content/uploads/2019/08/9fb39c6a906ccba5796a7c61d035683c.jpg?w=202&h=134&ssl=1>

[9/4-9/6 Luiz Hotsuo Ishikawa さん (花卉)]



最初の研修は、花祭りでお会いした石川さんのお宅にお世話になった。ラン科を中心とした花卉栽培をされている。過去には柿、野菜などを経て、花栽培に落ち着いたようだ。ブラジルでは蘭の花の人气が高く、店や家庭でもよく見かける。

暖房設備は使わずに換気等で温度調節をしながら、年間を通して多品種の花を出荷している。敷地内のハウスのほか、Santa Isabel から約 130km 離れ、São Paulo と 1600m の高度差のある Campos do Jordão にも農地を借りている。標高の高さを生かした抑制栽培を行い、出荷時期をずらすことで販売期間を長くすることができる。

石川さんのお母さんは2歳の時にブラジルに移住した戦前移民であり、原生林を切り開いて家を建てるところから始めたこと、ブラジルにとって日本が敵国となり学校に行けなくなったときのことなど、子供の頃の話をしてくださった。毎日味噌汁を食べているそうで、ブラジルに来て1週間足らずで日本食にお目にかかれた。



仕事内容：苗を入れるポットに藻類を詰める作業，発芽前の苗を並べる作業

仕事時間：7:00-16:00(11:00-1時間の休憩を挟む)

アグロフォレストリーの現場へ

サンパウロから飛行機に乗り3時間半でアマゾン川河口のベレン(Belém)に、そこからバスに乗って約4時間。川を渡るのので、途中でバスは渡し舟に乗る。

トメアスー(Tomé Açu)はベレンから約200km南に位置し、アマゾンにおける最初で最大の日本人移住地と言われている。昨年2019年で移住90周年を迎え、現在も千人ほどの日本人・日系人が住んでいる(日本経済新聞.2019.9)。主要産業の農業では、近年持続可能な農業、アグロフォレストリー(Agroforestry)が盛んに行われているということで注目されている。アグロフォレストリーとは、Agro(土壌・農業)とForestry(林業)とを掛け合わせた造語で、森林農業とも訳される。生物多様性を保ち、持続可能である農法を取り入れた暮らしをぜひ見たいと研修を希望した。



(ほとんどの道が舗装されておらず、雨季になると地面がボコボコになって車が通れなくなる。)

[9/18-9/20 小長野道則さん (カカオ, 胡椒, クプアス, アサイー, ドラゴンフルーツ)]



小長野さんの 230ha の農場はトメアスーで最も大きく、繁忙期には 80 人近くの従業員が働く。トメアスーのアグロフォレストリー先駆者と言われる故坂口陸さんとの親交があった小長野さんは、特に小農家にむけてアグロフォレストリーの普及活動を精力的に行っている。

アグロフォレストリーは樹木の落葉や家畜の排泄物などをうまく循環させて、より持続的な土地利用が望める。また、多様な昆虫や微生物の働きを生かして畑作りをすると、肥料や農薬が少なくて済むという。小長野さんの農場では毎週何らかの作物の収穫があり、樹種によって成長の特性を考えながら畑づくりが行われている。例えば、カカオには日陰が必要であるから、カカオの近くには高木が植えられている。また、数年で枯れる中期作物のそばには長期作物を植え、中期作物を収穫している間にその長期作物の果樹が成長する、などという数年ごとの計画を作り、農場はデザインされ続ける。多様な樹木と野鳥、昆虫が共生している農場は森の中を歩いているようだった。

最終日に CAMTA(トメアス総合農業共同組合)の独占代理店であるフルッタフルッタ(アマゾンフルーツを主にジュースに加工している)を見学した。

仕事内容： カカオの選別, 来年の胡椒の苗を植えるポットづくり

仕事時間：6:30-16:00

[9/23-9/25 久保 Ronaldo さん (胡椒, パッションフルーツ, カカオ, アサイー)]



昼過ぎに久保さんの農場についてパッションフルーツの収穫をした。正確な気温がわからないのだが、衣服を着ないと危険なほど日差しが強烈だった。次の日からは白胡椒の加工作業を手伝わせていただき、収穫→水につけて発酵させる→洗う(核部分と皮とを分ける)→乾燥させるという加工の一連の流れを知ることができた。

熱帯気候での作業を通して、地元従業員の方々との圧倒的な体力の差を感じた。経営者である久保さんは 6 時ごろから朝一番に働きはじめ、従業員たちが帰った後暗くなっても働いていた。

久保さんのお父さんは東京農業大学卒で農業拓殖移民としてトメアスーに入植された方で、日系移民の話や当時のトメアスーの話を伺うことができた。

仕事内容：パッションフルーツの収穫, 白胡椒の加工

仕事時間：6:30-16:00

[9/25-9/26 大西康弘さん (デンデー, 胡椒, カカオ, ドラゴンフルーツ)]



トメアスーの移民の歴史、アグロフォレストリーについて体系的に教えてください、私のイメージするアグロフォレストリーとトメアスーのそれとの違いがはっきりした。

トメアスーでは、主要だった胡椒栽培が1960年台後半からの病害によって壊滅的な被害を受けたことから、安定的な収穫物を得るための方法として、自然の植生の遷移を模倣した農法に行き着いた。先駆者である坂口氏がインドオの農的生活を参考にして、商品作物をつくる農業に応用させたといわれている。

トメアスーに来てからなんとなく違和感があったのだが、私のイメージしていたアグロフォレストリーは、このインドオたちの農的生活スタイルだったのだとわかった。トメアスーのアグロフォレストリーは、むしろ経済策としてのものであり、複数の作物を栽培することでより安定的に収入を得られるという利点がある。

大西さんのお宅では日本食しか食べないそうで、大西さんのお母さん手作りの豆腐もご馳走になった。

仕事内容：ドラゴンフルーツの収穫、除草

[9/27 稲田 Alison さん (ドラゴンフルーツ, アサイー, カカオ, 胡椒)]



ひとことにアグロフォレストリーと言っても、農園ごとに特色がある。稲田さんの農場では、ドラゴンフルーツとアセロラやアサイーなど様々な種類の混植を試し、どの組み合わせが適しているのか日々実験中だという。アグロフォレストリーでは市場の需要によって栽培する作物も適宜変更がしやすいという特徴もある。



農場を見せていただいた後、Alison さんのおばあさんが移住したときの話をしてくださった。移民の話は苦勞が多く暗い気持ちになることもあるが、記憶の呼びおこし方はそれぞれ個性があり、当然だが日本語を話せる私はその語りを聞くことができることをとてもありがたく思った。

お昼にご馳走になった”Peixada”という白身魚のシチューのような料理に心をつかまれる。

[9/30-10/1 藤橋登さん (野菜, カカオ)]



レタス、ケール、きゅうりなどの野菜を中心街のスーパーに卸している。各店舗への出荷量は多くないが、毎日少しずつ収穫し続ける仕事のやり方は日本の小農家と似ていると思った。日本的だと思ってもやはり規模は大きく、近くに住む従業員に力仕事や散水作業などを任せている。

80歳近い藤橋さんのお母さんはブラジルの人を雇うことに苦心しているらしく、彼らは「言われたことしかやらない」とよく言っていたが、それを聞いた私は日本で「最近の若いものは〜……」と同じような言葉をよく耳にすることを考えていた。

また、日系農家の家庭に行くと必ずと言って良いほどNHK放送がながれていた。日本とブラジルは12時間の時差があるため、私は藤橋さんのお母さんと毎晩8時に朝ドラを見ていた。

仕事内容：草引き、野菜の苗植え、きゅうりの収穫、出荷

仕事時間：7:30-16:00

#### 過ごしやすいブラジル

熱帯のトメアスーから一転。サンパウロから65kmに位置するアチバイア(Atibaia)市は、その冷涼な気候から、保養地としても人気が高い。市名の語源はインディオのツピー語で「味の良い水」、「清い流れ」という意味らしい。花卉産業が盛ん。



[10/5-10/13 田中規子さん・村上 Vicente さん (栗)]



ご夫婦でブラジルではまだ珍しい焼き栗をつくっておられた。焼き栗の加工品は、サンパウロ市内へ配達したり定期的に行われる市場に出品したりと、加工・販売までを一貫して行う6次産業の経営形態をとっておられる。

ブラジルでも近年オーガニック食品への関心が高まりつつあり、お二人の出店する市場にも有機栽培の作物や環境保全型の加工品を売る出品者たちが並んでいた。また、サンパウロに在住している日本からの駐在員には、子供に安心して食べさせられるものの需要があり、焼き栗のお菓子は人気があった。

田中さんは結婚してブラジルに「移住」された方だったので、私は日本にいるときに近い感覚で会話をしていたが、規格にとらわれない彼女の発想や世間話を聞くたびにブラジルにいることを思い出した。



野菜・花・養蜂の農場にも連れて行ってくださった。お二人の住む地域は日系移民が多く居住する地域で、定期的に行われている日系人のイベントにも参加させてもらった。日本でいう公民館のような場所で開かれた「父の日・子供の日祝賀会」では、各家庭から持ち寄られた料理を食べながら住民の太鼓の演奏や日本語の劇を鑑賞するといった、今の日本ではなくなりつつある地域の交流が行われていた。

仕事内容：焼き栗加工, 栗の木の剪定

仕事時間：8:00-昼過ぎなど。配達日や出店日などにより流動的。

自給自足を基本とした生活

夜行バスで約9時間、サンパウロ市から582kmに位置するミランドポリス(Mirandópolis)市。そこからさらに20km地点にアリアンサ移住地がある。信濃海外協会はじめ、富山、鳥取、熊本の海外協会によって創立され、後にブラジル拓殖組合に移管された。この地域では大豆、グアバ、マンゴー、肉牛、鶏卵、パイナップルなどが生産されている。

明治維新後の農村の疲弊から、政府は海外への出稼ぎ移民を奨励し、移民たちの多くは短期的にお金を稼いで日本に帰国するためにブラジルへと渡った。一方、アリアンサ移住地を建設した人々は、ブラジルに定住することを視野に入れており、アリアンサ移住地建設の理念に惹かれた若者も多く移住した。弓場農場を建設した弓場勇もその一人だと言われている。



[10/16-25 弓場農場]



1935年に弓場勇氏が数名の仲間とともに設立した共同体。「耕し、祈り、芸術する」という理念のもと、約60人が共同生活をしている。農作業に参加すれば宿泊費、食費は無料で滞在させてもらうことができ、私は草引きと収穫の作業を手伝った。他にもグアバ、マンゴーの栽培、牛豚鶏も飼育している。

1日3回の食事は各自が自由に取分け形式で、食事作りは当番制で女性たちが担当する。調味料や保存食だけでなく、石鹸などの生活用品も手作りする自給自足の生活を基本としている。



休憩時間や仕事終わりには楽器の練習をする人も多く、バレエ、絵画、合唱など、毎日何かしらの芸術活動の時間が設けられていた。子どもたちには日本語教育が行われており、皆が日本語を使って生活をしている。

日本からの移住者もあり、人の入れ替わりや時代の流れによって内部の雰囲気が変化し続けているなか、絶やすことなく日本語が生活で使う言葉とされている。住民それぞれの思う弓場農場にはギャップがあるだろうが、何を成すかというよりもいかに毎日を過ごすかという姿勢を持っている人が多いように感じた。弓場農場でもインターネットが使われるようになってから生活に大きな変化があったそうだが、少しだけ生活を共にさせていただいて、手仕事と農業は生活においてどのような位置付けになってゆくのだろうか、住民たちがここで生きる理由はより明確になっていくのだろうかと考えていた。

仕事時間：7:00-16:00（昼休憩あり）

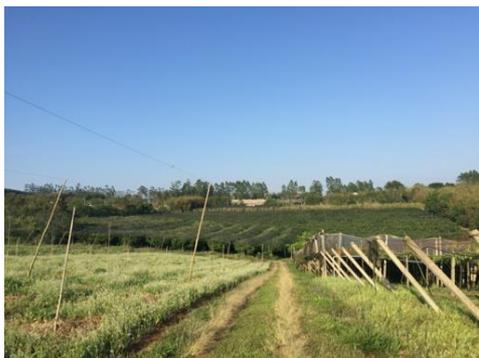
仕事内容：草引き、オクラの収穫・パック詰め、保存食・加工品づくり

## 福井村

サンパウロ市から南西に 200km の丘陵地帯にあるサン・ミゲール・アルカンジョ (São Miguel Arcanjo) 市からさらに 20km。コロニア・ピニャール移住地は第二次世界大戦後の移住ブーム期に福井県の援助のもと、県民移住者の移住地計画によってできたもので、別名「福井村」とも言われる。1950 年にイタリアブドウが導入されて以来、「ブドウの首都」と呼ばれる主要作物となった。



[10/29-11/1 山下治さん (果樹)]



アテモヤ(写真：https://dejioki.net/2018/11/post-127/)

4~5月：柿

5~6月：ビワ・アテモヤ

7~8月：アテモヤ・デコポン

10~11月：桃

12~4月：ブドウ

というように一年を通して果樹が実り、収穫と同時並行で剪定や摘果などの作業もこなす。経営自体は息子さんに世代交代しているが、80歳を過ぎても外仕事で体を動かすことが好きという山下さんについてブドウの摘果作業を手伝わせていただいた。従業員それぞれに担当の農地を決めて歩合で雇っているため、仕事とは別に個人で農地を借りて野菜などの作物をつくっている人も多いそうだ。



山下さんは福井村の初期移住者であり、インフラ整備だけでなく農協や日本語学校の設立にも尽力された。コロニア・ピニャールの日本語学校はモデル校として指定されているが、現在生徒は10名をきり、日系人含め都市部への人口が流出は止まらないようだ。山下さんのお孫さんは日本語が堪能だったが、ブラジルで出会った2世の方は日常会話ができるくらい、3世以降になると話すことも難しいという人が多かった。若い人は第二外国語を学ぶ優先順位としてまず英語が挙げられ、日本語を習得する必要性を感じづらいのかもしれない。山下さんのお宅で自身の移住の話、福井村の話、それから日本の話を伺う中で、日本語を学ぶのは日本語を使うためというより、こういった話を親や祖父母から聞く機会のためにあるのかもしれないと思った。

仕事時間：8:00-17:00 (休憩多め)

仕事内容：ブドウの摘果, 桃・デコポンの収穫

#### 4. 農業研修以外の活動について

3ヶ月という期間は結構長く、全てを書くことは難しいが、ほんとうにたくさんの方々にお世話になった。Belém の越知学園をはじめ、あちこちの日本語学校やイベントを見学させていただいたり、移民関連に詳しい方からお話を伺う機会を得たりと、ある程度の期間滞在したことで、日系社会の中にも地域性や時代の違いがあることを知れたことは大変よかったと思う。農業研修生というにはずいぶん力不足だったが、皆さんがあちこちに連れて行ってくださり、普段の自分では踏み込めない貴重な経験ができた。特にお家にお邪魔するときには、多世代の大家族で迎えてくださり、家族のつながり意識の強さを感じ、自分の家族との付き合い方を振り返ることが多かった。



日本語を外国語として学ぶ越知学園の授業。言語習得のみならず、日本語を通して日本の文化を学ぶことを意図し、日伯の友好な関係づくりに貢献する。



トラクターで胡椒を運んでいるところ。森を切り開いた道をガタガタ進む。荷台にたくさん積まれた胡椒袋の上にしがみついている私からみた景色。



農場での朝。赤道に近いトメアスーでは、朝6時に日が昇り、夕方6時には日が沈む。



ブラジルでは家族がそろったりお客さんが来てくれたり、何かと人が集まる時にはシュハスコ (churrasco) という肉料理を振る舞う。大きな肉を炭火でじっくり焼く肉はそのままでもおいしいが、野菜を刻んだビネガーのソース (Molho de Vinagrete) と一緒にさっぱり食べてもいいし、ファリーニャ (Farinha) というキャッサバを粉にしたものと一緒に食べる人も多い。



トメアスーの敬老会で婦人会の準備を手伝わせてもらったときのこと。お母さんたちはよく喋るしよく働く。どっちも休まない。卵焼き、巻き寿司、煮物などの入った日本食のお弁当を作ったが、お浸しはジャンプーというピリピリする青菜を使うなど、土地ならではの料理として変化しているものも多くあった。



トメアスーで数日泊まらせてもらったピメンタ御殿。1952年に胡椒（ピメンタ）が大高騰し、「黒ダイヤ」と呼ばれるほどのブームになった頃、立派な家が次々と建てられたという。



アチバイアの田中さん・村上さんの出店する朝市（Feira）の様子。竹を組み合わせたテントやエプロンで統一されている。卵、ベーコン、鉢植えなどこだわりの商品が並ぶ。接客上手なヴィセンチさんと元登山部のたくましい規子さんのナイスコンビ。



広い農場では大体トラクターの荷台に乗って移動する。仕事終わり、荷台に寝転がって揺られながら見たブラジルの夕焼け。



ブラジルは健康補助食品として知られるプロポリスの産地としても知られるが、ミツバチの毒を利用した治療法があるというので、連れて行ってもらった。その方法は、ミツバチの針を幹部にチクッと刺すだけ。ハチは一度人を刺すと死んでしまう。ガンが治った人もいい、連れて行ってくれた農家の方は全身あちこちに刺しまくっていた。私は特に悪いとことがなかったのだが、ドクターが心配性に効く頭にあるツボにひと針刺してくれた。次の日ちょっと痛み、この痛みが無事治るのか不安がやまなかった。



弓場農場で夜太鼓の練習をしているところ。毎年のクリスマス会にはバレエや劇、演奏を見るため、あちこちからお客が集まる。



広島県人会では定期的にイベントが開催され、この日は寿司教室が行われていた。ブラジルのレストランに置いてある寿司はジャムやフルーツが入っていたり、油で揚げられていたり、日本の寿司とは別物だが、この教室では料理人の先生が魚の捌き方から教えて寿司を握っていた。私は食べただけ。



11月2日は「死者の日」とされ、多くの人々が墓参りをする。平延さんの墓参りに同行させていただいた。日本で言うお盆のように、家族や親戚が集まる機会としての役割もあるのだろう。



ブラジルでも「カラオケ」は通じ、日系の式典やイベントでは歌謡曲や演歌などがよく歌われる。県人会のカラオケ大会でもみなさん気合が入っており、朝から晩まで次々と歌が披露された。私は前日からの料理の準備に参加し、カレーやかき揚げ、うどんなどの日本でもよく作られるものをお母さんたちに混ぜて手伝った。



サンパウロ州ボツカツ近くのパルジーニョというところで、香山文庫という移民資料を管理されている方を訪ねた。

静かで澄んだ景色にみとれ、写真を取り忘れることが多いのだが、帰り道にハッと思い出して撮った一枚。



サンパウロ市内も案内してもらい、街ごとの雰囲気の違いを感じた。移民国であるブラジルらしく、日系人が多い地域、イタリア系が多い地域など、サンパウロは街ごとの特徴がはっきりしている。

この写真は音楽や芸術が盛んな地域の近くで、かつては治安が悪い通りだったが、壁にアート作品を描くことで観光地化した。1週間もすれば絵がかきかえられるそう。



県人会の方のお宅を訪ねた。家の周りでブラジルの国鳥であるトゥッカーノ (Tocano) がギャーギャー鳴いていた。和名はオニオオハシ。



家族親戚が集まって手作りの料理でもてなしてくださった。初めて会う人にもハグをすることにだんだん慣れてきたころ。実家で親戚が集まるのは盆や正月くらいだが、ブラジルでは毎週末に誰かの家に集まる家族が多いのだとか。



フォスドイグアス(Foz do Iguacu)に住む村上夫妻の子供さんのお宅に泊まらせていただいたときのこと。息子さんと世界三大瀑布イグアスの滝を観光。



ブラジルとパラグアイの国境を流れるパラナ川に位置し、流域面積 80 万km<sup>2</sup>という巨大で発電実績世界一のダム。ブラジル国内に送電され、サンパウロにも届けられる。

BRICS の一国として増加する電力需要を賄う有力な供給源だが、生態系や住民との問題について映像やガイドで学ぶこともできる。



日本で知り合った、ブラジルにルーツを持つ友人の親戚がイタポランガ(Itaporanga)に住むと聞き、おばさんの家に泊めていただいた。

日本に住むイタリア系の移民が多い地域であり日本語が使いなかつたのがよかった。初めて会う私をあたたかく歓迎してくださり、友人やその家族、その周りの会ったことのない人にも感謝したい気持ちになった。



家族経営で20種以上の作物を作る農家を訪ねた。子供が七人いて、ある程度の年齢に達したら子どもにも作物を任せ、収益も本人のものとするこゝで、自分の仕事としてのやりがいをもたせたいという。山の傾斜を生かした畑作り、農薬を使わず有機肥料を用いて、小規模だがエネルギー循環を大切にしているように見えた。



おばさんは月に一回、おばさんたちと集まって手作りのおやつを食べながらビンゴゲームをする。



アチバイアはマンケイラ山脈の高台、標高 1450 メートルの大岩に登った。



1908 年 6 月 18 日, 781 人の日本人移民をのせた笠戸丸が、初めてブラジルに到着した。  
サントス港にある日本移民ブラジル上陸記念碑。



県人会の役員の方々が空港で見送ってくださった。ロベルト会長，村上夫妻，平延夫妻。

## 5. 研修を終えて

ブラジルに渡って2週間ほどたった頃、アマゾン川の河口南岸に位置する Belém という都市で、越知日伯学園の日本語教師として働いている方の家に滞在させてもらっていた。十代の頃に家族で移住された方で、年齢でいうと私の祖母くらいにあたる。そのお孫さんとは一年前に県人会のプログラムを介して広島で会う機会があり、ブラジルでの再会を果たすことができた。孫である彼女は日系三世にあたり、日本語を話すことは難しいようだったが、彼女と私は年齢が近いこともあって、英語を使ってよく話をした。彼女と「変わること」について話をしたことが印象に残っている。

彼女に「ブラジルに来てどんな変化があったか。」と尋ねられた。私は昔からあまり変わっていないと思うことがよくあり、自分の中で「変化」という表現を使うことがしっくりこなかったので、「日本にいるときの私と同じだと思う。」と答えると、彼女は「いや、あなたは変化しているよ。」と強い口調で言った。たとえ同じ行動をとっているとしても、昨日と今日は違う。その日の気候、その日に会う人、そのとき考えることはそれぞれ異なるものであり、そうすると一時も「同じ自分」というのは存在しないということになるというのだった。いやいや、それはそうなんだけど、どこにいても誰と話していても「自分」という自意識は実感できるし、今の自分は昔からの延長線上にあるとすると、その中で変わらない部分ってあるんじゃないかなと弁解するが、彼女はそれすらも変化してゆくものだ、と言う。「変わっている」「変わっていない」の議論が続く。私の拙い英語力も大きな原因だが、自分の言いたいことがうまく伝わらないという不安感を持った。

ブラジルで初めて会う人に挨拶するとき、私は“Japonesa (日本人)”と紹介された。日本にいるときは自分を日本人として意識することはなかったため、私は日本人なのか、と新鮮さを感じたものだった。実際私は典型的な日本人の部分を持っているらしく(遠慮をして言動を慎むなど)、ブラジルでは自分の希望をはっきりと言ったほうが良いとよく指摘された。渡航してしばらくは気持ちばかりが焦り、意気込んで自分を主張することを意識するようにしていた。しかし、自分の考えが相手に伝わらないという不満がつのって感情的になる時期もあり、県人会の方にご心配をおかけしたこともあった。お世話になっている方々に話を聞いてもらい、自分の考えをいうことは大切だが、相手に伝わりやすい方法を練習していくことも必要だと教えていただいた。

相手に不快な思いをさせたくない、傷つけないという恐れから起こる遠慮は、相手はこう思っているだろうと勝手に決めつけているだけだとも言える。それはしばしば自分の中だけの一辺倒の見方であることが多い。私の中に自分を変えないものとして捉える見方はあると思うが、人のことも変えないものとして見ているのではないかもしれないと思うようになった。特に日本を出てブラジルという環境の中では、風貌の近しさや日本語を話すことなど、自分と共通する性質を持つ人だと、時代も生きてきた環境も異なる人であるということを抜けおとしがちのように思う。

私はどこに行っても同じ私としてふるまっていると思っていたが、その思いの裏にはどこかで変わりたくない、変わってほしくないという気持ちがあったのではないかと振り返る。自分を説明するとき、このブラジルでの3ヶ月の経験や出会った方々の話が出るだろ

う。というのも、3ヶ月のブラジルでの日々はそこで完結しておらず、今も現地でみなさんが元気でおられることに、日本にいる私は励まされている。だからまたみなさんにまた会いたいと思うのだろう。そしてそのときには前回会った私とは変わっているはずだが、それを私はもう悲しまないのではないかと想像している。

日系移民たちは慣れない土地での移住生活で変わっていくものに揺らぎながらも、同時に日本人としての意識はより強固になっていったのかもしれない。今なおブラジルに生きている日系社会の文化は、彼らの日本人としての誇りや思いによって維持されていると思う。今回の研修も彼らの歴史なくして実現は不可能であり、日本語を使って研修をさせてもらったことで得られたものはずっと豊かになった。私はブラジルに行くまで日本から多くの人々がブラジルに渡ったこと、彼らが現地で築いてきた日系移民社会について、恥ずかしながらほとんど知らなかった。これから残り一年の学生生活で少しでも学びたいという展望を見据えている。

最後に、ロベルト会長、村上夫妻、平延夫妻はじめ広島県人会の方々の手厚いお力添えのもと、今回の研修が実現したことに深く感謝を申し上げ、ブラジルの皆さんの大きな器に受け入れていただき、広大な大地に触れのびのびと過ごさせていただいた日々を懐かしく思い出す。

#### 参考文献

- ・『ブラジル日系農村 ガイドブック』, IPTDA-JATAK
- ・「ありあんさ通信」(<http://www.gendaiza.org/aliansa/lib/1904.html>)